

## 令和3年度愛知県放課後児童支援員キャリアアップ研修

### テーマ④「発達障害児など配慮を必要とする子どもへの支援」(20220126)

学童保育所あそびばクラブ ヒライワヨウスケ

今回の研修では、「子どもの前に立つ大人は、自分は何者であるのか、なぜ子どものことをそのように捉えるのかを知っておく必要がある。」という、放課後児童支援員としての心構えというか、命題というか、テーゼというか（同じか）、意識の持ち方みたいなものを突き付けられた。

「放課後児童クラブ運営指針（以下、運営指針）」には、その第1章1-（3）に「放課後児童支援員は、豊かな人間性と倫理観を備え、常に自己研鑽に励みながら必要な知識及び技能をもって育成支援に当たる役割を担う」とあり、その第7章1-（1）にも「放課後児童クラブには、社会的信頼を得て育成支援に取り組むことが求められる。また、放課後児童支援員等の言動は子どもや保護者に大きな影響を与えるため、放課後児童支援員等は、仕事を進める上での倫理を自覚して、育成支援の内容の向上に努めなければならない。」とある。

運営指針がいわんとしていることは、まさに、このことなのかなと思う。でも、あんまり難しく考えると、たぶん迷宮入りすると思うので、すこしシンプルに考えてみる。

「子どもの前に立つ大人は」は、その発言や行動に大きな責任がともなうということであらわしていると思う。当たり前でそのとおりである。

「自分は何者であるのか」はすこし難しい。肩書は放課後児童支援員であり、放課後児童支援員がなすべきことも明文化されているけれども、この文言がいわんとしているのは、それだけではないと思う。肩書を外して一個人となったときに、「あなたは何者？」「あなたのポリシーは？」「あなたの生き方の哲学は？」と問われたらどう答えるか。そういうこともいわんとしているのだとも思う。「そんなこと考えて生きていない」となるかもしれないが、自分が生きてきた人生のなかでは、日々いろいろな選択肢があって、その都度、選択を迫られて、その是非や理由はさまざま、もしかしたら無意識に無自覚に選択しているかもしれないけれども、たとえ無意識で無自覚でも、なんらかの意識がはたらいて選択しているわけだから、結果的にそれは、あなたのポリシーであり生き方の哲学であり、それがあなたを形成しているといえると思う。だから、ほんの少しだけ意識的になれば、「自分は何者であるか」のヒントが見えてくると思う。

「なぜ子どものことをそのように捉えるのか」は、「自分は何者であるか」を自覚すれば、おのずとみずからの「保育観」や「子ども観」にたどり着けると思う。「保育観」や「子ども観」という言葉は、とても立派であるが、これは、そういう「観」＝「ものの見方や考え方」があれば良いというのではなく（ないよりあったほうが良いが）、その「観」の真偽はどうか。バイアスがかかっていないか。普遍的であるか。一般論や時代性にそうしているか。といったことを絶えず疑う必要があると思う。この自分を疑う行為そのものが、「なぜ子どものことをそのように捉えるのか」につながると思う。

放課後児童支援員として仕事するにあたり、いつもそういう意識で子どもたちと向き合い、ときには並走したり伴走したり、またあるときは、うしろから押したりおんぶしたりするわけけれども、放課後児童クラブは、生活の場であるから、もっと生々しくてドロドロしたものもあるわけで、いつでも冷静沈着になれるわけではないけれども、冒頭の文言は、いつでも振り返らなければならないものだと思っている。

おわり